

この60年を振り返る その2

昨日の合格発表で思い出すのは、合格してからの教科課外が3月中にあって、5日間も通った挙句、入学式までの間にほとんど勉強疲れのようになってしまったということです。その後の高校時代については、何度も書いた記憶があるので省略します。

大学入試においては、一期校二期校制度の最後の年に、福島大学の小学校課程に合格したものの、落ちた東北大学にリベンジをすべく、高月講習会に通いました。リベンジは果たされず、浪人の後、立教大学に進みます。練馬駅の徒歩10分ほどの食事付きの下宿に住み、大学に通いましたが、授業はほとんど受けることなく、大学のサークルの部室にたむろして、読書三昧の日々を送りました。その時の読書の貯金は今でも役に立っています。時折、神田の古書街をうろついたりしながら、なけなしの仕送りから「高橋和巳全集」を購入し、卒論のために少しずつ読み始めたのも大学1年の時です。

大学近くの喫茶店兼夜は飲酒ありになる「マダムシルク」なる場所にたむろして、毎日のように先輩から同級生や後輩たちとともに、時間を過ごすことが日課となりました。同人誌作りや、読書会と称する只のお話会にうつつを抜かし、いつの間にか取得単位が滞る事態に目覚め、1年で86単位を取得したのが2年時で、3年時も75単位を取得し、残りは卒論と落としてしまっていたフランス語の必修科目のみで4年生を迎えました。

教育実習は、母校で行いました。指導教官は大田和先生で、実習教科は国語の現代文。教材は梶井基次郎の「檸檬」でした。4年生の時には、家庭教師のアルバイトで約20万円の収入がありました。小学校3年生と5年生の兄弟を週に3日教えていました。一緒に将棋をやったり、書き取りをやったり、鉄棒で逆上がりを練習したり、かけっこをしたりしながら、少しずつ勉強も身に付けるといった濃密な時間を送りました。夕食もごちそうになっていましたので、年の離れた兄弟のように、毎日を過ごすのが日課となりました。東京を離れるときに、一番悲しかったのは、この兄弟との別れでした。

大学を卒業すると、平工業高校の時間講師を1年務め、軟式野球部を手伝いながら、国語教員としてかわいがってもらった様々な先輩諸氏に恵まれました。

1年の後、新採用教員として、白河高校の中にある白河二高という定時制の高等学校に着任し、3年の後、三春にある田村高等学校に転勤しました。そこでは、野球生活にどっぷりとつかり、教え子たちに恵まれました。子供も二人持つことができ、9年の後、磐城高校に転勤になったのです。(続く)